

【 宮城県の方言概観 】

ここでは伝統的な宮城県方言を概観します。

(各地域や世代によって、それが見られるか否かは異なります。)

¶ アクセント

仙台市を境にして、仙台市より北はアクセントの型を持つ**有型アクセント地域**であり、**仙台市を含む県南半はアクセントの型がない無型アクセント地域**である。

☞例えば「箸」と「橋」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっています (=型がある)、それによって単語の区別が付きませんが、無型アクセント地域では高低が決まっていない (=型がない) ため、区別されません。

共通語話者がこの無型アクセントの発音の地域のことばを聞くと、文が平らでのっぺりしているとか、区切れがわからず意味が取りにくいとの印象を受けるようです。

¶ 音声

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは平たく言えば、単語の頭以外にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になることです (専門的に言えば、(有声) 母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になること)。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません (下の例で言えば柿は「ガギ」にはなりません)。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルになってしまい、「上げる」と混同しそうですが、「上げる」のほうはゲが鼻にかかった音 (鼻濁音とも言い、この現象を鼻音化と言います。ここでは「ケ°」のように半濁点で表記します) のアケ°ルとなり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ°ル

で両者の混同は起こりません。同様にダ・ザ・バ行も鼻音化します（ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します）が、これらは衰微が著しく、高年層からも聞かれないことがあります。

例) ガ行：上げる → アケ°ル

ダ行：肌 → ハンダ

ザ行：風 → カンゼ

バ行：首 → クンビ

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象（またはその逆も）を「中舌化」（ちゅうぜつか、なかじたか）と言いますが、宮城ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどが互いに近い音になります※。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」と発音され、これらは区別がありません。

例) 獅子（しし）、煤（すす）、寿司（すし） → すべてスス

知事（ちじ）、地図（ちず）、辻（つじ） → すべてツンズ

※ただし、母音単独のイだけはエに統合されます（後述）。

▼シュ、ジュ、チュの直音化

シュが「ス」、ジュが「ズ」、チュが「ツ」と発音される。

☞これに上記の中舌化も合わせると、シ・ス・シュがすべて「ス」、ジ・ズ・ジュがすべて「ズ」、チ・ツ・チュがすべて「ツ」という発音となります。

例) 爺さん（じいさん）、十三（じゅうさん） → 両方ともズーサン

手術（しゅじゅつ） → スンズツ

注射（ちゅうしゃ） → ツーシャ

▼キ（キャ行）の口蓋化

キが「チ」と発音される。また、キャ、キュ、キョも「チャ、チュ、チョ」と発音され

る。

☞一般的にはこれは「口蓋化」の一種と見られています。口蓋化とは舌の前の部分が上あご（硬口蓋）に接近する現象を言います。キがキとシの間のような音になるとい、似た現象は東北一般で見られますが、宮城では極端な口蓋化が起こってチに近くなります。

例) 機械（きかい） → チカイ
 救急車（きゅうきゅうしゃ） → チューチューシャ
 今日（きょう） → チョー

▼その他、以下のような特徴もあります。

- ・母音単独のイとエの区別がなく、エに統合されている。

例) 息（いき）、駅（えき） → 両方ともエギ
 鯉（こい）、声（こえ） → 両方ともコエ

- ・アイ・アエという母音の連続（連母音）は融合して[ɛ:]（共通語のエー[e:]よりも口を開いて発音する）と発音される。

- ・ヒの音がシに近い音となる。

¶ 文法

▼共通語の「が」、「を」にあたる格の格表示

共通語の「が」格、「を」格が無助詞で表示されることが多い。また「を」格相当のものとしては「バ」や「ドゴ」が用いられることもある。

☞共通語の「が」のような主格を表す助詞や、「を」のような目的格を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることが多いです。

例) 主格 : 俺 行く (俺が行く)
 目的格 : 酒 飲む (酒を飲む)

☞また、共通語の「を」相当のものとしては「バ」や「ドゴ」が用いられることもあります。

例) 酒バ飲む (酒を飲む)

俺ドゴ連れて行ってくれ (俺を連れて行ってくれ)

▼格助詞「サ」

「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところが多いですが、存在の場所を表す「ここサある」は言えないなど、その用法は「に」とは若干の違いがあります (ただし、若年層では存在の場所を表す「サ」も使えるという報告もあります)。

例) 東京サ行く

おれサ貸せ

見サ行く

▼助動詞「タ」「タッタ」

「タ」は共通語の過去・完了の助動詞「た」よりも用法が広く、**現在目の前にあること**の**確認**などにも使われる。

例) (私は今、) 学校にいる → 学校にイタ

(私は今、) 手紙を書いてる → 手紙をカイテタ

また、「タッタ」は**過去の思い出**など、**現在と切り離された過去**で用いられる。

☞「タッタ」は、「タ」と比べて過去の出来事が発話時に存在する場合には使われにくく (この場合は「タ」が用いられます)、過去の出来事が発話時に存在しない場合に使用されやすくなります。これを上記では「現在と切り離された過去」と表現しました。

以下の例で説明すると、①は昨日もらった桃が今もあるときの発言であり、これは過去の出来事が発話時に存在すると読みとることができます。このような場面では「タ」が使われます。②は昨日もらった桃が今はもうないという状況であり、これは過去の出来事が発話時に存在しないと捉えられます。このとき、「タッタ」が用いられます。

例) ①きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタ。あんたも食べる？

②きのう、近所の小沢さんに桃をモラッタッタ。

あんたが来るなら少し残しておけばよかったなあ。

<例文は竹田 (2011) より引用>

▼助動詞「べ」

共通語の「～だろう」(推量)や「～しよう」(意志)に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

例) 明日、雨だべ (明日雨だろう。)	<推量>
明日は早く起きッペ (明日は早く起きよう。)	<意志>
お祭り、お前も行くべ? (お祭り、お前も行くだろう?)	<確認>
みんなでがんばッペ (みんなでがんばろう。)	<勧誘>

▼終助詞「チャ」

強調、当然、働きかけの意味を表す「チャ」が用いられる。

☞具体的には、相手が知っているはずの事柄を示し確認させるなどの機能があり、共通語の「でしょ」「じゃない(か)」「よね」などのような意味を持ちます。

例) A 1 : ニショッコ (二燭光) って5ワットぐらいか。
B 1 : 60ワットぐらいだッチャ。(60ワットぐらいでしょ。)
A 2 : え、そんなに光らないッチャ。(え、そんなに光らないでしょ。)

▼その他、以下のような特徴もあります。

・逆接既定条件(共通語の「けれども」)は県北部で「ケンドモ」、県南部で「ゲントモ」が用いられやすい。順接既定条件(共通語の「から」)は「カラ」が用いられる。

・待遇表現は「ス」「(デ)ガス」「(デ)ゴザリス」「イ(ン)」などが用いられる。

例) ス : 取りス (取ります)
(デ) ガス : んデガス (そうです)
(デ) ゴザリス : おはよゴザリス (おはようございます)
イ(ン) : お茶でも飲まイン (お茶でも飲みなさい)

【参考文献】

加藤正信（1969）「東北方言概論」『言語生活』210

加藤正信（1992）「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・
久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』
明治書院

佐藤亨（1982）「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編
『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会

竹田晃子（2011）「テンス形式および文末の「ケ」の用法」小林隆編
『宮城県・山形県陸羽東線沿岸地域方言の研究』東北大学国語学研究室
東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救う』ひつじ書房